

KAWA
RINI
YOMU
HITO

代わりに読む人
0

創刊準備号

▼特集▲

準備



「0から1へ」

文芸雑誌『代わりに読む人0 創刊準備号』をお届けします。2019年から「可笑しさを世界をすこしだけ拡げる」をモットーにユーモアのある文芸書を刊行している出版レーベル・代わりに読む人が発行元です。作家・友田とんが主宰する、いわゆるひとり出版社です。この度、出版レーベルと同じ名前の文芸雑誌を刊行します。「読む」ことを通じた思いもよらない隣人や異界との出会いを生み、読む／書く人たちの試行錯誤の場となる「公園」を目指します。創刊号ではなく、あえて「創刊準備号」とし、雑誌を作ることとゼロから考えてみることにしました（詳しくはp.147の拙稿「雑誌の準備、準備としての雑誌」をお読みください）。

有名、無名の分け隔てなく、文芸、アート、科学、実務などの分野から次の作

品を読みたい、広く読まれてほしいと感じる人たちに執筆していただきました。寄稿いただいたものはエッセイ、小説、批評、漫画などさまざまで、しかも必ずしもどれか一つのカテゴリーに当てはまるものではありません。当初想像もしなかったような作品が集まりました。それぞれの作品を楽しんでください。

創刊準備号の特集は「準備」です。そして、小特集「これから読む後藤明生」はこの雑誌が続くかぎり、連載していく予定です。さらに、執筆者には「2021年に読んだ本」を紹介してもらいました。

これから創刊する雑誌の輪郭がおぼろげには浮かび上がってきた気がしますが、まだまだその形は見えません。普段当然と思っていることを一つずつ考えながら読んで面白いものを作っていきます。こうした、0から1へと雑誌が出来上がっていくプロセス自体である創刊準備号を楽しんでもらえたらと思います。

二〇二二年五月

代わりに読む人代表 編集発行人 友田とん

代わりに読む人

創刊準備号

▼特集▲

準備

009 二見さわや歌行商日記

019 陳詩遠 解凍されゆく自身とジュネーブ近郊の地下で起こっている乱痴気騒ぎについて

027 小山田浩子 バカンス 準備の準備のために、「蓮實重彦論」を書くことになったか

037 伏見瞬 準備の準備のために「蓮實重彦論」を書くことになったか
あるいはなぜ私が『とそれからのこと』(ポートオーソリテイ・バスターミナルで起こったこと)

073 近藤聡乃 ただ暮らす

051 田嶋裕敏『貨物船に太平洋を渡る』とそれからのこと
準備の準備としての数学



085 わかしよ文庫 ハツ柳商事の最終営業日

097 柿内正午 会社員の準備

107 海乃 凧身支度

115 太田靖久 ×××××××

121 佐川恭一 ア・リーン・アンド・イーヴル・オブ・ムーンカレード・ハウズメのオチ

129 鎌田裕樹 オチがない人生のための過不足ない準備

137 毛利悠子 思いつき

147 友田とん 雑誌の準備、準備としての雑誌

『歴史物語』『歴史物語紀行』を撮る
205 友田とん 後藤町お祭り

159 2021年に読んだ本

216 コバヤシタケシ dessin ①

▼連載・小特集▼

後藤明生

195 東條慎生 見ることの政治性
——なぜ後藤明生は政治的に見えないのか？

これから読む

185 蛙坂須美

後藤町お祭り

218 執筆者略歴

221 編集後記

KAWA RINI YOMU HITO

177 haco

日常と非日常の境界線

本人の読むに代わり

佐川恭一 著

アドルフコ会全史

定価 三二〇〇円＋税 ◎ 四六判角背上製本 四四四頁 ISBN978-4-9910743-4-9 C0093

安月給の工場で働く男がかつて自ら考案したデタラメな宗教に翻弄されていく表題作ほか、荒唐無稽な展開と不謹慎な冗談が固定観念を壊してくれると同時に心の暗部を照射する響感必至の不謹慎長編小説集。

わかしよ文庫 著

うろん紀行

定価 二二〇〇円＋税 ◎ 四六判一部カラー上製本 二〇四頁 ISBN978-4-9910743-3-2 C0093

大江健三郎、太宰治、後藤明生などの様々な小説を読み、ゆかりのあったり、なかったりする場所を訪ね、何かを思い、思い出す。エッセイのような、小説のような《小説を読む物語》。

友田とん 著

パリのガイドブックで東京の町を闊歩するシリーズ

突然、啓示のように降ってきた言葉をただ真面目に実践しようとする「私」に何が起るのか？ 日常を冒険に変える長編エッセイシリーズ。

1 まだ歩きださない

定価 七〇〇円＋税 ◎ 新書判カラー並製本 四八頁 ISBN978-4-9910743-1-8 C0295

2 読めないガイドブック

定価 一五〇〇円＋税 ◎ 新書判カラー並製本 九四頁 ISBN978-4-9910743-2-5 C0295

全国の書店でご注文いただけます。

在庫状況により1週間～10日ほど入荷までお時間をいただく場合がございます。
(書店の皆様へ、代わりに読む人の書籍は八木書店から各取次を通じて、すべての帳合書店に納品します。)



創刊準備号ということで、「準備」をテーマに、代わりに読む人が気になる人々にエッセイ、小説、漫画を書いていただきました。日常にある準備、新生活への準備、準備とは。十六人の「準備」をお楽しみください。



行商日記

二見さわや歌

3月のある日

青空に誘われて初めての行商。なんとなくここでやろうと思っていた近所の川の土手に行き自転車の荷台にオカメサブレを並べていたところ、通りかかったおばあちゃんが「何か売ってるの?」と話しかけてくれた。「はい。お菓子屋なんですけど店舗がないので自転車のお店を始めました」「そうなの、それじゃ3枚下さい」こうして開店から数分で初めてのお客様が出来た。この川はお花見の名所なのでその後もけっこう売れた。2時間半で5,440円。



解凍されゆく自身と ジユネーブ近郊の 地下で起こっている 乱痴気騒ぎについて

陳詩遠

石鹼を食べたことがある。友人の結婚式の引き出物でもらった高級石鹼で、持ち帰ってすぐ包装を剥がして2週間机の上に放置し、忘れた頃にツルツルした見た目からチョコだと思ってかぶりついた。突き刺すような塩味と苦味で異変は明らかであったが、程なくしてレモンの上品で爽やかな香りが口中に広がったので「ああ、塩レモンね（流行ってるよね）」と納得してしまい思い切りよく百回くらい咀嚼することになった。幸い飲み込む前に石鹼を食ってことに気づいたが、うがいをするのと口から信じられない量のシャボン玉がボワアアーと出てきて洗面台が泡で覆い尽くされた。人生とはクソそのものである。高級石鹼の泡立ちのよさに舌を巻きつつ、日常から奇襲を

バカンス

小山田浩子

たつつんがジップロックをぶら下げ帰ってきた。「散歩してたらもらった。猪肉だって」受け取ったマキちゃんは重たつと言った。「え、誰に?」「近所のおじいさん、多分ばあちゃんと仲よかったっぽい」「じゃあたつつんのことも知ってるんだ?」「んー多分。猪撃ちとか、する人いるからねこのへん」マキちゃんがジップロックをどんと食卓に置いた。「冷凍? かっちかち」マキちゃんが私を見た。日焼け止めしか塗っていない頬に長いまつ毛の影が落ちて、私が頷いて袋をつつくとビニールの下にもしゃつとした層がありその奥がなるほど硬い。肉の色は見えない。凍った塊肉がラップでぐるぐる巻きにしてある



準備の準備のために、
あるいはなぜ私が「蓮實重彦論」
を書くことになったか

連載が決まった

本号は「代わりに読む
人」の準備号であり、執筆
者は「準備」をキーワード
として与えられ、それにま
つわるエッセイ、批評など
を書くことになっていると
伺っているが、本稿は私に
とって「準備」の「準備」
にあたるものである。どう
いうことか。

伏見瞬

『貨物船で太平洋を渡る』と それからのこと

田巻秀敏

昨年、貨物船での旅行体験をまとめた同人（自主制作）誌『貨物船で太平洋を渡る』を出版しました。当初は細く狭い読者層を想定していましたが、意外にも多くの方の目にとまり二刷を販売するまでとなりました。また、コロナ禍という特殊な状況にもかかわらず、書店での販売、

トークイベントや写真展、文学フリマをはじめとする同人誌頒布会など、多様な形態のイベントに参加し、読者や同人活動を行う方々と交流する機会を得られました。これは、私の期待値を大きく超える結果となりました。ただ、交流を通じて知り合った方々にお話を伺うと、どうやら私

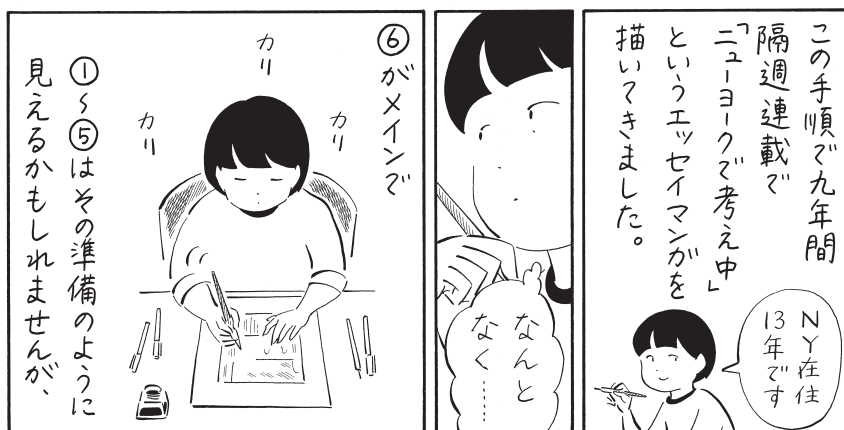
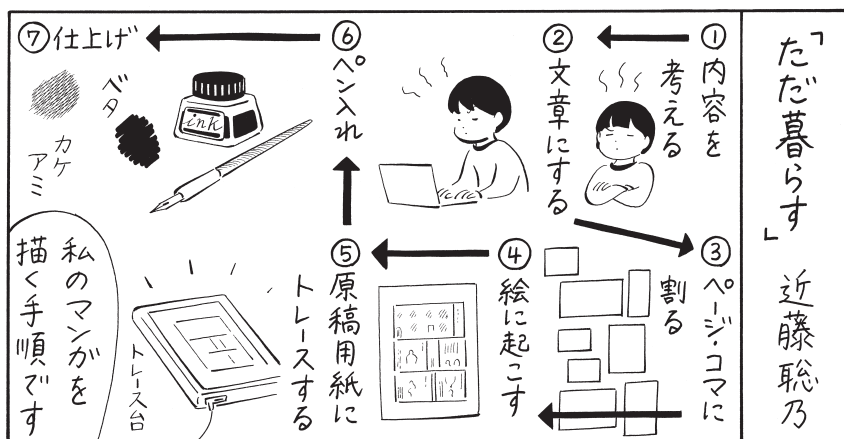
完璧な想像

(ポートオーソリテイ・バスターミナルで起こったこと)

オルタナ旧市街

〈今日はどんなことが起こるかもしれないって想像をした?〉

転ばぬ先の杖、というのは実にいいことわざだと思う。私なら杖のほかに手をついても痛くないように軍手や、頭を打つてもいいようにヘルメットも用意しておくね。備えることに關しては、私は人よりも慎重で、いくらか得意なほうだと思う。先月は会社の同僚からハイキングに誘われて、防寒用の上着とシューズを新調し、ポケットのたくさんついたリュックにお役立ちグッズを詰め、まず出ることはないからだいじょうぶと笑われておきながら、熊避けの鈴をあたらしく買った。ただ実際のところ、山にのぼっている最中は何もかも億劫で、頂



準備の学としての数学

橋本義武

これから数学を学ぶ人にとって「これを学んで何の役に立つのか」と問うのは自然なことだろう。数学には時間がかかる上に、数学をするときには強い集中が求められる。そして求められる時間の量と集中の強度を甘く見積もっているとなかなかうまくいかない。そういうものなので、学んだことで得られるものがわかっていなければ割に合わないと思うのが人情だ。しかし多くの場合、学んだことで得られるものが何なのかわからないままに、数学することは始められ、かけるべき時間と注ぐべき集中を強いられることになる。

八ツ柳商事の最終営業日

わかしよ文庫

「田村君には、今年の幹事を担当してもらうことになっているから。ね？」

大盛りの弁当を平らげたあと、低GI大豆バーを口いっぱい頬張りながら大橋は言った。

「忘年会の幹事ですか」

「違うよ。毎年恒例の行事で、最終営業日に社員みんなで会社でお酒を飲んだり、ご馳走を食べたりする。多少羽目を外すんだけども」

「四半期ごとの期末会を、居酒屋でなく会社で出前をとってやるような、そんな感じですか」



会社員の準備

柿内正午

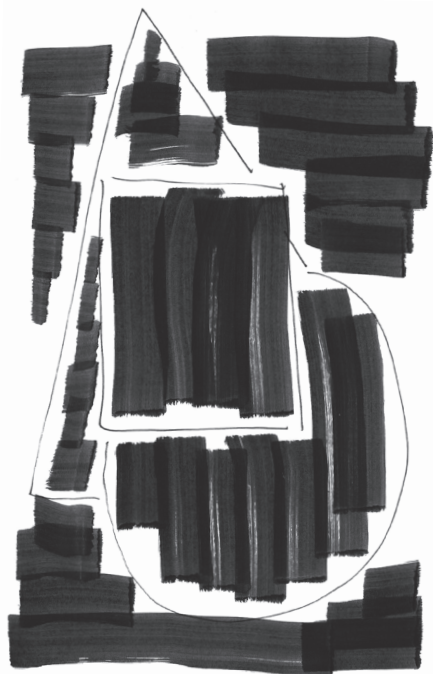
三〇歳になるころから毎朝きまつて顔を洗うようになった。

それまでも世では朝に顔を洗うことがいわゆる「常識」とされていることは見聞きしていた。けれども不思議と僕の習慣として朝に顔を洗うというのはなかった。両親に教えられなかったのだ、と信じていたが、実家に帰ってそう言うときい剣幕で否定された。つまり、僕は両親からきちんと毎朝の洗顔を躰けられていたにもかかわらず毎朝の洗顔を怠り続け、ついこないだまで顔を洗わないまま一日を始めるといふことを当然としていたわけだ。



身支度

海乃侃



中学一年生の秋に大阪に転校したチャボから、今ちょうど東京に遊びに来てて、よければ今日ご飯とか、どう？ と早朝にメールがあった。

大学入学に際して上京した僕は、卒業後もとりあえずは東京の小さな調査会社で働いている。今はちょうど正月休みで地元へ帰省していた。大晦日に実家に着いてからは外出もせずぐうたら過ごしていて、三が日最終日の今日は十二時四十三分発の新幹線で東京に戻るようになっていた。

チャボ。懐かしい響きだ。元気だろうか。相変わらず寝癖はすごいだろうか。と、僕はまだベッドに横になっただけのままメールの送り主である旧友のことを思い出していた。手は無意識に髪に伸びた。寝癖がトサカみたいだから、チャボ。学区が別で違う小学校に通っていたけれど、中一では同じクラス、同じ野球部だったから仲が良かった。そんなチャボはしかし半年も経た

××××××××

太田靖久

果たしてこれを準備不足と呼ぶのだろうか。事前に「お知らせ」していただかなければ、そもそも備えることなど不可能だ。「お知らせ」していただいたうえで、こちらが怠慢を重ね、実力を発揮できなかったり、ろくな対応をしなかったのだとしたら、責められても仕方がない。だから本来はこの件に関して私に非はないし、反省も必要ないはずだ。

そう頭で理解していてもなお、こちらに不備があったと思わされてしまうのはなぜなのだろう。ふいに空から落ちてきた神の黄金の羽根を受け止め損ねたことは、私に人としての魅力が欠けているせいだと、そう

感じられてしまうからかもしれない。半世紀近くを過ごした人生を丸ごと否定された暗い気持ちである。

私の鼻先をかすめ、水たまりに落ちた神の黄金の羽根はすでに溶けてしまった。その思い出すら、もはや遠い記憶である。私が得たのは、その出来事をどこかに書き残すべきであるという教訓だけで、それこそが私からの「お知らせ」になると信じている。この経験が誰かに伝承され活かされることにより、不毛な罪悪感から少しは解放されることができるとはずなのだ。

ア・リーン・アンド・イーヴル・ モブ・オブ・ムーンカラード・ ハウンズの大会

佐川恭一

ア・リーン・アンド・イーヴル・モブ・オブ・ムーンカラード・ハウンズの大会がすぐそこまで迫っていたが、まだカーブの握りをうまくマスターできていなかったし、支えなしで一輪車に乗ることもできなかったし、激安スーパー裏の心臓破りの坂を自転車で立ちこぎなしで上りきることもできなかったし、週一で変質者情報が出る公園の調査にも着手していなかったし、M-1用のネタもつかみしか考えてい



オチがない人生のための 過不足ない準備

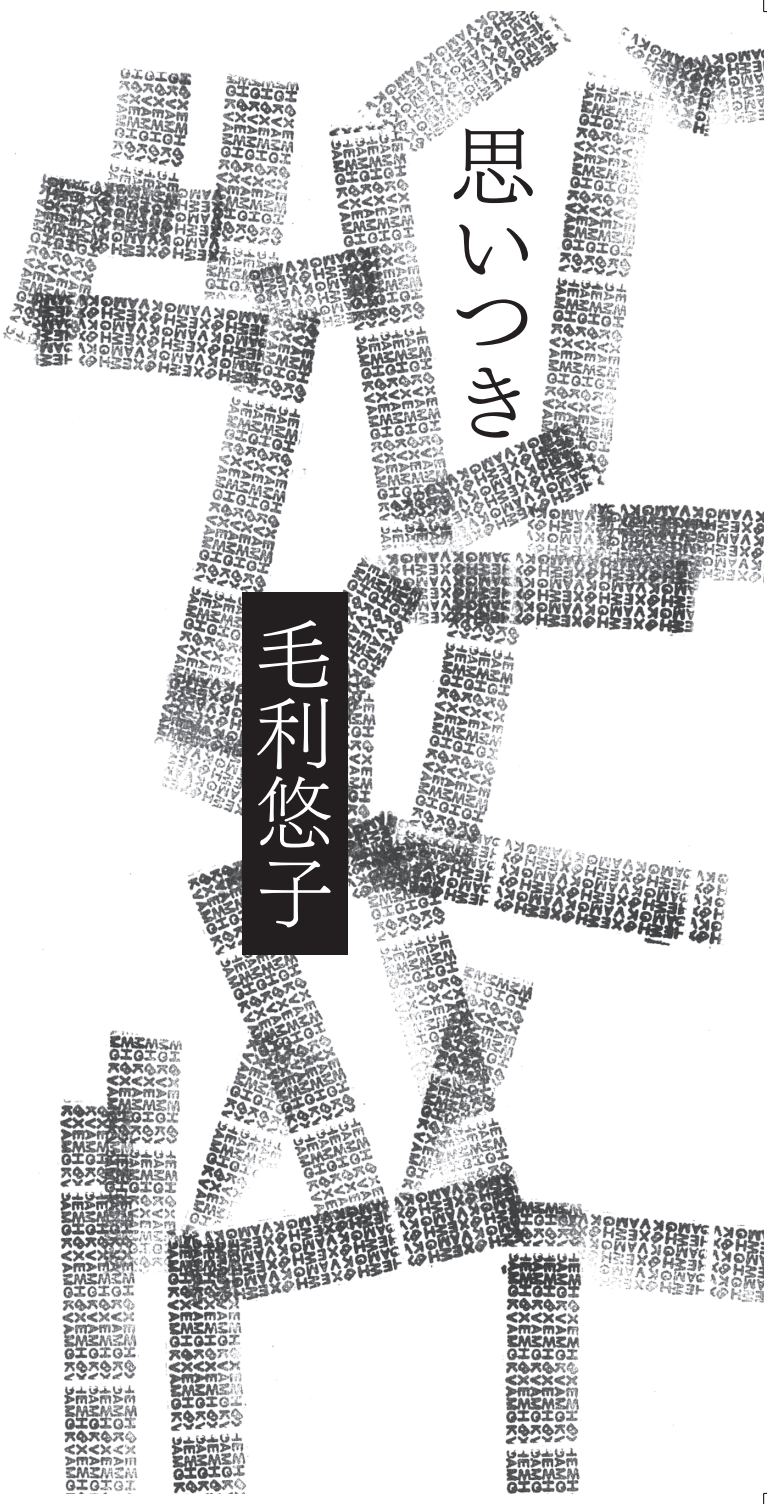
鎌田裕樹

1. 炊飯器

炊飯器に目覚ましの機能があったら、ひよっとして便利なのかもしれない。米の香ばしい匂いと炊き上がりを知らせる電子音で目が覚めて、時計を見ると5時47分。寒さでしばらく布団から抜け出せずに、前の晩、6時に予約をしたはずなのに、13分早く炊き上がった謎について考えていた。

土鍋で米を炊くなら蒸らしの時間が肝要だと和食の本に書いてあった。炊き上がってすぐの米は柔ら



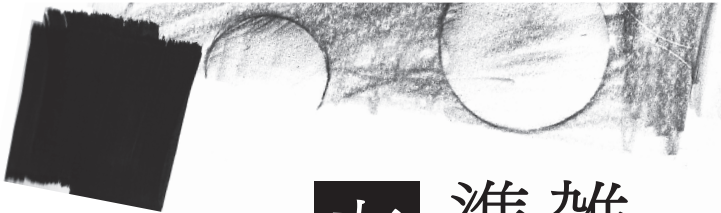


思いつき

毛利悠子

物事を深く考えずに行動するのが好きだった。

朝起きてタバコをすいながらぼーっとして思いつきのまま行動する、といったような学生生活。「今日から風呂に入らなかつたらどうなるだろう」と思いついて、そのまましばらく風呂に入らなかつたことがある。朝起きて顔を洗わずに、近くのコンビニにコロッケ



雑誌の準備、 準備としての雑誌

友田とん

塚本 アハハハ、試作実験などしませんでしたよ。最初から生産設備をつくったんです。

——えっ、試作開発も何もしないで、いきなりぶっつけ本番ですか？

塚本 そんなにリスキーだなんて思いませんでしたよ。人ができるんだから自分たちもできるだろうと。

——楽観的というか、極楽トンボというか？

塚本 ええ、そう言われてもしようがないですね。

——それで開発研究に着手した？

塚本 研究じゃありません。製造にとりかかったんです。

相田 洋「NHK電子立国 日本の自叙伝 上」より

2021年

読んだ本

に

齋藤なずな 著

『初期傑作短編集 ダリア』

(青林工藝舎、二〇二二年)



いつだって物語に引っ叩かれた。的確な強さとタイミングで、自分のことも、自分がしてきたことも、なにもかも間違ってるんじゃないかっていう気持ちを抱えて、街とか電車とか、あらゆる場所で他者に視線を投げる。
綺麗な服を着た人が駅の暗がりですべて吐いたりしていると、あんな風に外で吐くために今日の服を選んだわけじゃないよなっと思う。

想像力が及ばない状況に出くわした時、がっかりする気持ちと、わくわくする気持ちの両方が芽生えるから、もっと映画を観たり本とか漫画を読んだりしたくなる。
そんな作品集です。

太田靖久

川上弘美 著

『神様』

(中公文庫、二〇〇一年)



「作家は、その処女作に、その作家の生涯にわたる主題を書き記していると言う。」

私のデビュー作が収録された単行本の、林静一さんによるあとがきの中の一文です。本当だろうか、と心に残り、川上弘美さんのデビュー作である「神様」を読んだ時にも考えました。大好きで、何度も繰り返し読んだ本ですが、渡米する際に実家に残してきてしまったのを、去年買い戻して久しぶりに読みました。そして、やっぱり本当のようだと思います。冒頭の一文が心に残ったのは、初期作品より良いものを作るのは難しい、私の作品はだんだんダメになってしまうのではないか、という不安があったからなのですが、川上さんが「神様」の中

『アウレリヤノがやってくる』 高橋文樹 著

(破滅派、二〇二二年)



文芸同人「破滅派」を運営する高橋文樹の、まさに破滅派を題材として描かれた二〇〇七年新潮新人賞受賞作。東北から上京してきた美しい男・アマネヒトが「代理詩人」を目指して破滅派に加入し成長していく物語で、恐らくほぼ実在の登場人物たちがあまりにも魅力的で一気に読まされる。愛すべき人物が次々に出てきては面白いことやダメなことをしまくる突き抜けた怪作で、基本的に笑って読めるのだが、作者は独特のユーモアで人物と物語を包み込みながら「本当の事」を言おうとしている。ここに描かれる「バカでいられる時期」の強い輝きと「責任を引き受けるべき時期」への移行過程は、きつと多くの人の胸を打つだろう。ほとんどの場合「バカ期」は限られており、その強引な延長の先に待つのは破滅の報いである。私たちは破滅への欲望を抱えながら、何らかの仕方ですべてと解しなくてはならない。本作はそのあわいにいる人間たちの時間を鮮やかに切り取ってみせてくれる。

佐川恭一

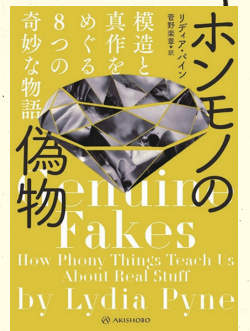
に書き記した主題は、川上さんの近作の中に生きており、ダメになんかなっていませんでした。このように時間を重ねて作り続けることもできるのだ、と励まされる思いでした。

近藤聡乃

これから読む 後藤明生

GOTO MEISEI

▼連載・小特集▲



「本当の言葉とは？」と考えていた一年だった。それで書店をぶらぶらして目にとまったのが本書である。アンディ・ウーホール亡き後に、残されたシルクスクリーンの版を用いて製作された『ウーホール作品』、「バナナ味」と言うべきバナナフレーバー、先史時代の壁画を擁する洞窟のレプリカなど。本書で取り上げられる偽物にまつわる物語は、本物と偽物はきれいに線引きできるものではないし、偽物だから価値がないわけではないと教えてくれる。例えば、中世絵画の贋作は、贋作者が模倣の過程でオリジナルをどのように観、いかなる文脈に置いていたかを詳らかに語る貴重な資料となる。ダイヤモンドは炭素にすぎず、人工的に作ることができる。偽物であるが、それゆえに本物が背負わざるをえなかった採掘の過程にある搾取の歴史や現実から自由でありえるのだという。それで思い当たった。同じことは言葉にも言える。現実の言葉だけが本当の言葉ではない。虚構にこそ宿る本当の言葉がある。あるいは、虚構にこそ担える本物がある。

友田とん

リディア・パイン 著

菅野楽章 訳

『ホンモノの偽物
模造と真作をめぐる
8つの奇妙な物語』

(垂紀書房、二〇二〇年)

『リバー・ワールド』
川合大祐 著

(書肆侃侃房、二〇二一年)

事故のような出会いだった。現代川柳の世界線で言葉の弾丸を撃ち続ける川合大祐の第二句集。何が起きているのかよくわからないが、ものすごく強く惹かれ、ふとした瞬間に手のひらに見たことのない結晶が立ち現れる。世界に翻弄されないように表象を攪乱するかのような運動と距離の過剰性。強く生きようと思う。

コバヤシタケシ



2021年に読んだ本

生誕九十年を迎える2022年に、後藤明生を読みはじめます。

読むことと書くことは表裏一体であると訴えつづけた後藤明生を、これをきっかけに手に取ってもらいたくて、後藤明生の初心者からファン、批評家まで、四人にさまざまな角度から新鮮な視点で書いていただきました。



日常と非日常の境界線

haco

街を歩くのが好きだ。

なるべく、建物がたくさん建っている場所を歩きたい。昔から栄えている場所に建ち並ぶ、古いビルやマンションをみながら歩くのが楽しい。最近建てられたものにはない、凝ったデイトールや、様々な色味のタイルがパラスよく貼られている壁のような、手間をかけられた意匠をみると、ドキドキする。最近はおそらくオリンピックの影響もあり、いろいろなものがどんどん新しくなってしまうけれど、その中できつと、昔から変わらないま

後藤明生と幽霊

『雨月物語』『雨月物語紀行』を読む

蛙坂須美



「後藤明生訳『雨月物語』、『雨月物語紀行』について書いてほしい」
今回の依頼はおおむねこうだった。成程とわたしは思った。

わたしは後藤明生のプロパーではないけれど、その文章には相当の
関心を持ってきた。小説『挟み撃ち』は何度も読み返しているし、後
藤を経由して知ったゴーゴリについても、多少は考えてきたことが
あった。

が、後藤明生と『雨月物語』は盲点であった。

わたしは三度の飯より妖怪、怪談、幽霊といった怪しげなものを愛

見ることの政治性

——なぜ後藤明生は政治的に見えないのか？



東條慎生

一 脱政治的スタンス

「内向の世代」という言葉がある。大江健三郎や石原慎太郎といった若くして華々しくデビューした作家たちと同世代ながら、一〇年ほどの会社勤めをした後、一九六〇年代後半ごろに出てきた古井由吉、後藤明生、黒井千次、阿部昭などの書き手を指す言葉だ。小説家などみな内向的ではないかと思うかも知れない。命名者の小田切秀雄が言ったのは、政治的参加に対する消極的な姿勢、社会状況への積極的介入を避けた、「自我と個人的な状況のなかにだけ自己の作品の真実の手ごたえを求めよう」とする傾向のことだ。高橋和巳、小田実らの次にあたる世代のこの傾向を戦前の転向に

後藤明生が気になって

友田とん

「〈ごとうあきお〉さんという人の本が随分たくさんあるわね」

一月二日だったか、朝食のまえにダイニングテーブルで本を読んでいると、上京して正月を我が家で過ごしていた母が本棚を眺めていた。

「それは〈ごとうめいせい〉って読むんだよ」

確かに母の前には、ずらりと後藤明生の本が並んでいた。やたらと目立つそれらが気になって尋ねるのも無理はない。何年か前に国書刊行会から出た『後藤明生コレクション』（全五巻）、『挟み撃ち』、『笑いの方法』、『日本近代文学との戦い』、『復習の時代』、……。本棚が一段分、後藤明生で埋め尽くされていた。ちょうど二〇二二年は小説家・後藤明生の生誕九十周年であり、雑誌『代わりに読む人』でも後藤明生の小特集を組もうと思いい、年末に本棚を整理した時に、一番いいところに後藤明生の本を集めてあったのだ。しか

執筆者略歴 (五十音順)

蛙坂須美 (あさか・すみ)

怪奇愛好家・怪談作家。幼少期より水木しげるの作品に薫陶を受け、怪奇な世界にのめり込む。ブログ「悲鳴窟」にて聞き集めた実話怪談を公開。

海乃風 (うみの・たこ)

1992年、新潟県長岡市生まれ。東京都在住。小説を中心に作家活動をしています。

太田靖久 (おおた・やすひさ)

1975年生。神奈川県出身。小説家。2010年、新潮新人賞受賞。著書に『サマートリップ 他二編』(集英社)、『のの』(書肆汽水域)・写真家・金川晋吾との共著『犬たちの状態』(フィルムアート社)。その他、インディペンデント文芸ZINE『ODD ZINE』企画編集。

小山田浩子 (おやまだ・ひろこ)

小説家。広島県出身、在住。作品はほとんどが短篇小説だがそろそろ長いものも書きたい。著書に『工場』『穴』『庭』『小島』(いずれも新潮社刊)。

田巻秀敏 (たまき・ひでとし)

IT技術者。同人誌『貨物船で太平洋を渡る』出版をきっかけに寄稿のお誘いをいただく。敬愛する写真家はウィリアム・ガーネット。

陳詩遠 (ちん・しおん)

物理学者。実益や応用を一旦忘れた研究の世界でプカプカ漂流しながら、面白いアイデアを探し物思いに耽る日々を送っている。スタンドアップコメディヤーの鑑賞にハマっており、最近のイチオシはJen Kirkmanである。

オルタナ旧市街 (おるたな・きゅうしがい)
イマジナリー文藝倶楽部「オルタナ旧市街」主宰(会員数1名)。ためにならないネットプリントマガジンを2019年より不定期刊行中。

柿内正午 (かきない・しょうご)

会社員。「町でいちばんの素人」を自称し、文筆活動などを行う。初の単著『ブルーストを読む生活』(HAB)発売中。最新刊は『町でいちばんの素人』『会社員の哲学』『あまり読めない日々』(ともに自主制作)。原稿依頼を受け付けております。ご連絡は akamini.house@gmail.com まで。

東條慎生 (とうじょう・しんせい)

ライター。2016年から2018年まで季刊『未来』に後藤明生論を連載。「後藤明生レビュー」や「向井豊昭アーカイブ」というウェブサイトも運営しています。共著『北の想像力』に鶴田知也論、『ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち』にイスミール・カダレの紹介のほか、図書新聞に時々書評を書いています。

友田とん (ともだ・とん)

作家・編集者。出版レーベル・代わりに読む人代表。日常や文学に可笑しさを見出す作品を発表。著書に『百年の孤独』を代わりに読む(私家版)、『パリのガイドブックで東京の町を闊歩する 1・2』(代わりに読む人)。敬愛する作家はガルシア＝マルケス、後藤明生。

haco (はこ)

趣味はレトロなビルやマンションを探しながら街を散歩すること。サイケデリックでキュートなスイーツを制作するpsychodelic sweets spicaとしても活動中。これまでに『いびルの世界』『東京ハンサムイースト』『秀和レジデンス図鑑』を共同執筆。好きな作家は、遠藤周作、村上春樹。

鎌田裕樹 (かまた・ゆうき)

農家見習い、文筆業。1991年生まれ。元書店員。京都の恵文社一乗寺店など、十年間本屋で働いたのち、農業の世界へ。自然のなかで培う感性と読書を下地に文章を書く。好きな作家は、辻まこと、堀江敏幸。

近藤聡乃 (こんどう・あきの)

1980年千葉県生まれ。マンガ家、アーティスト。アニメーション、マンガ、ドローイング、エッセイなど多岐にわたる作品を国内外で発表している。「A子さんの恋人」全7巻(KADOKAWA)、『ニューヨークで考え中』1〜3(以下続刊・亜紀書房)・作品集『近藤聡乃作品集』(ナナロク社)、など。

佐川恭一 (さがわ・きょういち)

滋賀県生まれ。京都大学文学部卒業。『踊る阿呆』で第二回阿波しらさぎ文学賞受賞。著書に『ダムヤーク』(RANGAL文庫)、『舞踏会』(書肆侃侃房)、『アドルムコ会史』(代わりに読む人)などがある。

橋本義武 (はしもと・よしただけ)

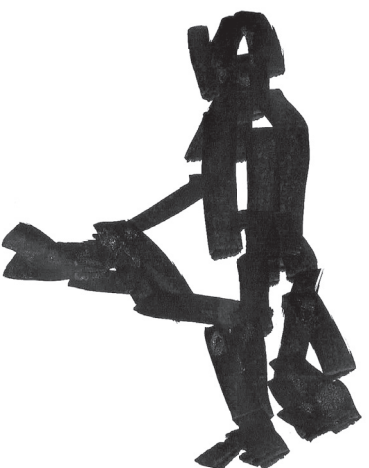
数学者。最近亡くなった西村賢太は好きな作家です。彼がよく使う「嫌い(あきたりない)」という言葉、意味はよくわからないけれど使ってみたくります。彼が私淑する藤澤清造の故郷・七尾には少し縁があります。

伏見瞬 (ふしみ・しゅん)

批評家・ライター・音楽家。旅行誌を擬態する批評誌『flocust』編集長。音楽／映画／書籍などを起点に文章を生成。格好よくしくて愉快な文章ならなんでも書きます。2021年12月、イースト・プレスより『スピッツ論「分裂」するポップ・ミュージック』を刊行。代わりに読む人での連載準備中。

二見さわや歌 (ふたみ・さわやか)

お菓子屋です。オカメサブレの店KBIS BAKE SHOPの全てを行います。株式会社キビス代表。本が好きです。



毛利悠子（もうり・ゆうこ）

美術家。環境などの諸条件によって変化してゆく「事象」にフォーカスするインスタレーションや立体物を制作。「シドニー・ビエンナーレ2022」「サンパウロ・ビエンナーレ2021」など国内外の展示多数。今年はアンステイチュ・フランセの招聘で3か月間ほどパリに滞在予定。 mohrimae/

わかしょ文庫（わかしょぶんこ）

作家。1991年生まれ。著書に『うろん紀行』（代わりに読む人）がある。

【装画・挿画・ロゴ】

佐貫絢都（さぬき・あやか）

画家。1993年静岡生まれ。京都造形芸術大学大学院日本画コース卒業。主な展示に『ARTISTS FAIR KYOTO 2021』（京都文化博物館）『2015年』（People）。

【装幀】

コバヤシタケシ（こばやし・たけし）

書籍の装幀に携わるグラフィックデザイナー。戸田ツトム事務所を経て2012年に独立。人文・思想、サブカルチャーから経済まで。文芸や漫画のデザインに意欲あり。川柳が楽しい。川柳の句集を刊行予定。

【組版】

飯村大樹（いひむら・ひろき）

1995年水戸生まれ。フリーランスで書籍組版をしている。文芸メールマガジン「イエローページ」を配信中。本が好き。

【校正】

サワラギ校正部（さわらぎこうせいぶ）

2020年発足の校正ユニット。実態は校正の経験を積みみたい方々の実践の場として立ち上がった勉強会です。主宰者は08年から校正者に。以前は書籍編集者でした。

編集後記

昨年八月ごろから本格始動した雑誌の企画は、著書を読んで
は寄稿依頼の手紙を書くところから、原稿のやりとり、誌面の
製作、初校、再校と進み、一冊の雑誌として形になり、ようやく校了が視野に入っ
てきた。まだやり残した編集作業はあるが、ここで編集後記を書いていく。

読む／書く人の試行錯誤の場としての「公園」を目指し、人々を応援しているつ
もりであったが、送られてくる原稿や戻ってくるグラに寄稿者や制作関係者から
「がんばってくださいね」「大変と思いますが、無理せずに」「もうすぐ完成ですね」
「完成が楽しみです」などなど暖かいメッセージが添えられ、雑誌の創刊準備号の
話をすれば書店主・書店員さんからも「雑誌、たのしみしてますよ」と励まされ、
応援されているのはむしろ私なのだったと今更ながら気づいていったのだった。

というわけで、お手玉を回すようにして、一人一人の著者や制作関係者と同時に
やり取りをし、しばしばお手玉をぼとぼと下に落とし、手元に抱え込むようなこ
ともあったのだけれど、どうにか刊行の目処がついた。自著の執筆や単著の編集で
も同じかもしれないのだけれど、何をコントロールし、何を自然に任せるのか。そ
もそも二〇人以上が関わる雑誌の編集発行人といえども、到底コントロールしけれ
るものではないし、むしろそうした自然のように有機的な作用を積極的に残すこと
にこそ、雑誌の存在意義があるのかもしれないとようやく理解しはじめた。

さて、雑誌の完成は終わりではなく、むしろここから正念場である。多くの人
に手にとってもらえるように届けていく段階がある。これは編集後記にも載らない
部分だ。そして、またこれを読んで、何かを感じたり、思い出したり、場合によっ
ては何かを書き出したり、始めたりしてくださる方が現れることを期待している。
いや、きっとそういう人がこの一冊から現れるという確信めいたものを持っている。
そうした人といつかお会いできますように。寄稿、制作に関わってください皆さん、
そして読者の皆さんにあらかじめ感謝を申し上げます。年1回発行が目標です。
次号（創刊号）は2023年初夏刊行予定です。

（友田とん）

読者の声募集

雑誌『代わりに読む人』では感想を募集します。それぞれの
作品や特集について、読んで感じたこと、思い出したこ
となどをメールや読者カードでぜひお寄せください。誌面
の許す限り、なるべく次号に掲載し、読む／書く人たちの
交流を目指したいと思っています。また、本誌を読んで話す読
書会を開催くださる方はサポートしますので編集部までご
連絡ください。

代わりに読む人0 創刊準備号

2022年6月15日初版第1刷発行

発行者 友田とん

発行所 代わりに読む人

〒152-0001 東京都目黒区中央町 1-14-11-202

Email: contact@kawariniyomuhito.com

Web: https://www.kawariniyomuhito.com

印刷製本 シナノ印刷株式会社

装画・挿画・ロゴ 佐貫絢都

装幀 コバヤシタケシ

組版 飯村大樹

校正 サワラギ校正部（北村さわこ、
松井亜衣、柳沼雄汰、戸田有喜子、高橋奈央）

© Kawariniyomuhito 2022, Printed in Japan
ISBN 978-4-9910743-0-1 C0093

毛利悠子（もうり・ゆうこ）

美術家。環境などの諸条件によって変化してゆく「事象」にフォーカスするインスタレーションや立体物を制作。「シドニー・ビエンナーレ2022」「サンパウロ・ビエンナーレ2021」など国内外の展示多数。今年はアンステイチュ・フランセの招聘で3か月間ほどパリに滞在予定。 mohrismey/

わかしょ文庫（わかしょぶんこ）

作家。1991年生まれ。著書に『うろん紀行』（代わりに読む人）がある。

【装画・挿画・ロゴ】

佐貫絢都（さぬき・あやか）

画家。1993年静岡生まれ。京都造形芸術大学大学院日本画コース卒業。主な展示に「ARTISTS FAIR KYOTO 2021」（京都文化博物館）、「1995年」（People）。

【装幀】

コバヤシタケシ（こばやし・たけし）

書籍の装幀に携わるグラフィックデザイナー。戸田ツトム事務所を経て2012年に独立。人文・思想、サブカルチャーから経済まで。文芸や漫画のデザインに意欲あり。川柳が楽しい。川柳の句集を刊行予定。

【組版】

飯村大樹（いいむら・ひろき）

1995年水戸生まれ。フリーランスで書籍組版をしている。文芸メールマガジン「イエローページ」を配信中。本が好き。

【校正】

サワラギ校正部（さわらぎこうせいぶ）

2020年発足の校正ユニット。実態は校正の経験を積みたい方々の実践の場として立ち上がった勉強会です。主宰者は08年から校正者に。以前は書籍編集者でした。

